

これからの幼児教育と ICTの活用(2)

位置測位データを活用した個々の幼児の育ちと学びの理解の深化と、教師の省察、家庭との連携の充実につながるICTの活用方法に関する調査研究



このパンフレットは、文部科学省の「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」の委託費による委託業務として、〈国立大学法人神戸大学〉が実施した令和2年度幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承諾が必要です。

1 これからの幼児教育におけるICT※～研究の背景～

幼稚園教育の大切さ

幼稚園

初めての集団生活の場。家庭では体験できない社会・文化・自然などに触れる場

パンデミック下の幼児の権利保障

生存権保障：安全・健康

教育保障：自然・文化・人間関係

* 好事例：文部科学省（2020）

「新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取り組み事例集」

「幼稚園等再開後の取組事例集」等

WHO（世界保健機構）（2019）
「5歳までのこどもに関する運動・座位活動・睡眠に関するガイドライン」

映像と接する時間(Screen time)

- 2歳まで＝ゼロ
- 2歳-5歳まで＝1日1時間未満

ICTを活用しよう

教師の実践支援に

- 個性重視のために
- 主体性を尊重するために
- 幼児理解のために

幼児には

- リアリティを
- 諸感覚を使った経験を

令和元年度の本事業研究により開発した位置測位システム（北野、2020）を活用



全ての幼児の登園から降園までの動きや居場所に関するデータをリモートで集積し、教師を支援
いつでもICTが教師の目となりデータで支える
教師の実感の確認、実践の客観的根拠の提供

本研究の課題

位置測位システムによる教師支援

- 幼児理解の深化
- 教師の省察
- 家庭との連携の充実

2 幼児の室内遊びと生活に関する実態

【研究のデザイン】

* 安全確保の観点のみならず、幼児教育の質にかかわる説明責任を果たすために
個々の幼児の理解に基づく幼児教育の内容の充実を図るために

- 位置測位システムを活用
- 3、4、5歳児それぞれ2クラスについて、すべての幼児を対象
- 一人一人の幼児の登園から降園までの室内での位置情報等を測定（室内での移動距離、速度、滞在時間、滞在場所、動線等）



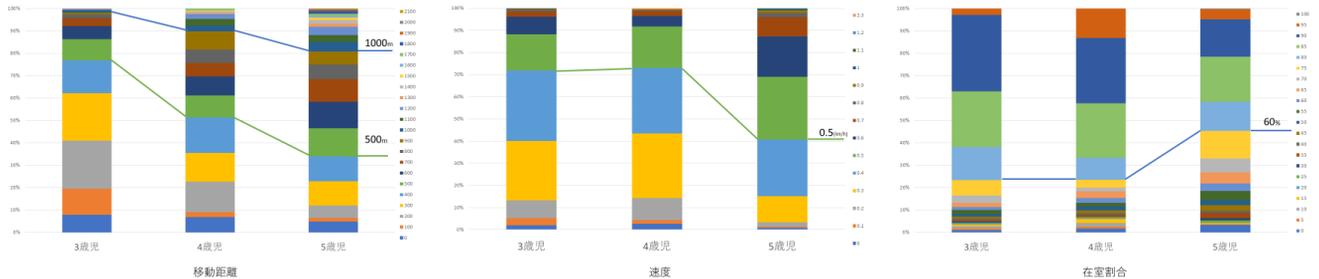
遊びや生活の実態、発達的な変化や特徴、個性を明らかに

※ 幼稚園に加え、幼保連携型認定こども園や保育所でも幅広くご活用いただきたい内容です。

【結果と考察】

(1) 園生活での育ち

移動距離、速度、滞在時間、いずれもの経年的発達の実態が客観的にあきらかに
個人差：経年的に際立っていく



(2) 個性の豊かさとその理解

移動距離、速度、滞在時間の長短や大小による評価のみではない、個性の理解を

例1：3歳児40名のデータを比較

- 移動距離の一番大きなA児と一番小さなB児を比較：B児はA児の37%
- 一日の室内での移動距離が一番大きかった日の数：A児2日、B児1日
しかも、19/40人が一度はその日一番室内での移動距離が多かった日がある

例2：移動距離の大小があらわす多様な実態（他のデータと総合的に検討）

- 移動距離の少ないC児：同一箇所で没頭して製作に取り組む姿
- 移動距離の多いD児：多種多様な興味関心のもとで大いに移動する姿
- 移動距離が多いE児：どの遊びをしようかと迷いながら移動する姿

*教師が一人一人の幼児の理解を深める上で大切にしたいこと

- 個人特性の側面と、その日その日の幼児の様子による違いが生じる側面への理解を
- 幼児理解の深化には、個々人内の、気持ちや、人間関係、環境の影響の考慮を

(3) コーナーでの姿からみた発達的特徴

個々の嗜好性と発達的特徴の両者を踏まえた実践創りを

- 自然物コーナー/絵本コーナー
3歳児の滞在時間が多い（次第に減少）
5歳児は大変少ない（持ち運び、製作等に活用したり、友達と共有）
- 可変コーナー（興味関心に基づき教師と幼児が構成・再構成するコーナー）
5歳児の滞在時間が長い

*教師が環境を構成する上で大切にしたいこと

- 園生活当初（3歳児）：安心してじっくり観察し、触れ合い、取り組める環境を
- 5歳児：固定した環境のみならず、自ら構成・再構成できる自由度の高い環境を
（想像力、試行錯誤、創意工夫につながる）

【研究のデザイン】

(1) 幼児理解への教師支援

幼児の移動距離や滞在時間等のデータを基に、幼児の内面を第三者と教師が推測

*第三者とは、園外者であり、データを収集した研究者および研究協力者

(2) 教師の省察の支援

教師が知りたい情報に関するデータを提供し、データの生かし方を考察

【結果と考察】

(1) 幼児理解への教師支援

教師の予測と合致したのは、幼児19人中16人。不一致の理由は以下のとおり

<不一致の例>：第三者は、滞在時間が長いことにより、幼児がその遊びを好んでいると考察したが、教師は、実際の幼児の言動や表情から以下のように推測

- ・一つ一つの動きがゆっくりで丁寧であり、結果として滞在時間が長くなった(2名)
- ・絵に苦手意識があり、最後までつくったり描こうとして時間がかかった



幼児の移動距離や滞在時間等のデータは幼児理解に寄与するが、滞在時間の長短からでは、幼児の心の状況等について測定できないという課題が明らかになった

(2) 教師の省察の支援

○教師の知りたいこと①

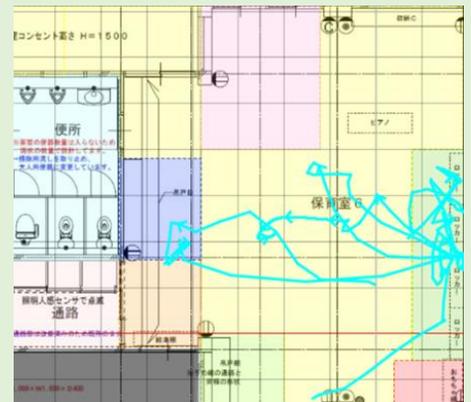
困ったことがあってもすぐに言い出せない幼児が、困っている時にどのような行動をとっているか。

○提供した位置測位データ(右図)

ロッカー前をうろうろしている。

○教師のデータからの省察

幼児は教師を探しに行くのではなく、ロッカー前にいることを教師に気付いてもらいたいと思っていたかもしれない。今後は、教師が幼児に近づき、幼児が話しやすくなるようにしたい。



○教師の知りたいこと②

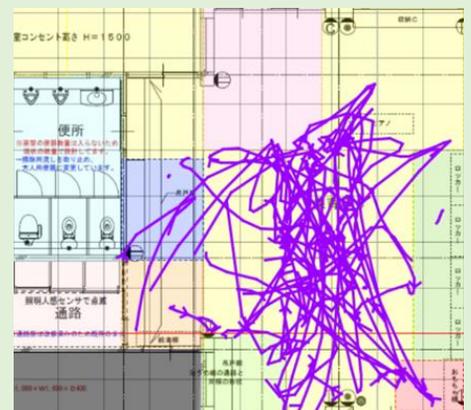
幼児の登園から遊びまでの間に、自分(教師)はどのような動きをしていたか。

○提供した位置測位データ(右図)

室内全体を移動している。

○教師のデータからの省察

自分(教師)は全体を移動していたが、ままごとコーナーの中に入り、幼児と一緒に遊ぶような動きはしておらず、ままごとをしている幼児に深く関わっていなかった。今後は、それぞれの遊びでただ声を掛けるだけでなく、一緒に入って遊ぶような援助をしたい。



本研究で明らかになったこと

幼児や教師の動線や滞在時間の分析は、幼児理解や教師自身の保育の振り返りに有効
一方で教師は、幼児の言動や表情も踏まえて幼児を理解しており、その**高度な専門性**も明らかになった。